

# 地域介護力の底上げを目指す「人生劇場紙芝居」の活用による参加型ナラティブ・ケア実践研究事業

社会福祉法人 鹿追恵愛会

〒081-0202 北海道河東郡鹿追町北町1丁目13

## 助成事業の概要

### 【実施目的】

施設においてナラティブなケアを推進するためにはお年寄り一人一人の人生の理解が大前提となる。

本事業では、高齢者一人一人の人生や想いを『人生劇場』というコンセプトで紙芝居にすることによって、より多くの職員や家族での理解とその共有を促進しようと考えたものである

### 【実施内容と時期】

1. 事業モデル対象者2名の選定：【5月～6月】
2. 対象者に対する「人生の来し方ヒアリング調査」実施。：【6月、8月、11月の3回】
3. 「人生劇場紙芝居」の構成案とシナリオづくり。：【8月、11月】
4. 3を基に、絵づくり（外部委員1名に委託）：【28年1月～2月】
5. 作品の上演会を公開で開催。：【28年2月27日】
6. 5に対する職員、家族の感想をヒアリングで調査した。またモデル入所者の状態変化の観察調査を行った。：【28年2月～3月】

## 事業の成果

### （1）お年寄りを元気にする効果

紙芝居のモデルとなった入所者2名は、ヒアリング開始当時、意識はしっかりしているものの、健康状態は深刻で、「せめて事業期間中は在命で

あってほしい」と願うくらいであった。しかし、1回目6月のヒアリングが終わると、「あの人たちは次はいつ来てくれるのか」と職員に質問し、8月の2度目を心待ちにしていた。それが気持ちに張り合いを与えたのだろうか、8月には6月時点より健康状態が持ち直したように見えた。2回目の後もさらに意欲を見せ、当初の予定にはなかった3回目のヒアリングを実施させられるほどであった。

人生の話聴く、このことで高齢者は徐々に記憶を蘇らせ、それとともに気力も蘇らせているものと観察できた。

### （2）ヒアリングの度にどんどん蘇る記憶と気力回復

ヒアリングを重ねる度に、新しい記憶を口にできるようになった。満州から引き揚げた川崎さんなどは、完成した紙芝居の中の両親の絵を見た後に「そういえば、実家に帰ったら、母親が食卓に僕の分の陰膳を作って供えてくれていたのを思い出した」等と、大切なことを思い出してくれた。

そして、前述したように、記憶の蘇りが気力の回復にもつながるのではないかと考えられる。

### （3）家族との対話促進効果

本プロジェクトの紙芝居上演が終わった後、「もうヒアリングに来てくれないと分かれば気力が萎えるのではないかと懸念していたが、モデルの両名ともにいまだ気力と健康状態を保っている。その理由としては、家族との対話が進んだものと推察される。親子であってもなかなか話しづらい

ことはある。特に謝礼や謝罪の言葉は照れもあってなかなか口にできないものであるが、紙芝居の上演を親子で一緒に鑑賞したことが契機となって、親子の新しい対話が進んだようである。

紙芝居の中で、親が当施設での看取りを希望することを改めて知らされた子供が、それを理解した上で親と接する。そこにこれまでより一歩進んだ親子の関係が構築されていると推察される。

#### （４）世代間の壁を超える感動と共有・・・紙芝居の持つ力の確認

紙芝居上演会にはモデルの高齢者、モデルの家族、施設の入所高齢者と介護職員だけでなく、地域から老若男女が集まった。その中で軽い認知症を抱えた入所者が涙を流したり拍手をしている、若い介護学生も涙を流している、幼児や小学生が1時間じっと集中して聴いている、そんな様子を目の当たりにした時、「やはり紙芝居は老若男女が共有できる最高のツールではないか」という確信を持てるに至った。

#### （５）より上質な介護職を育てられる可能性とそれらが介護・医療コスト低減につながり得る可能性

紙芝居の上演を観て涙を流していた介護職や学生たちには、今後彼らの職場の中で高齢者に接する際に、姿勢や心構えの面で必ずや役に立つものを与えられたのではないかと確信している。

技術力は変わらなくとも、その技術をいつどのように使うかで介護の効果に差はでる。介護職の認識の差が介護の結果・成果・効果にも当然反映される。

このことは、今回のような職員教育を重ねることで、介護の質や、ひいては介護・医療コストの低減につながる可能性を示唆している（病院で末期を迎える高齢者が減り、施設看取りや自宅看取りが増える場合、医療費の低減効果は大きい）。

（６）さらなる研究の継続につなげられる可能性  
今回、実践研究の名の下、プロジェクトを遂行したが、その成果は「どうやら人生劇場紙芝居というアイディアは高齢者自身に最期まで自分らしく生きるエネルギーを与えるとともに、家族や職員等とも共有を図りやすい手段である」という当初の目論見に関して、第一歩の実証を示したレベルである。さらに他の現場や専門家、加えて学術的にも認められる研究レベルへと高めていかなければ、広く普及はさせられないものと認識している。

今回得られた結果は、次の段階の研究プロジェクトに挑戦していくために十分な動機となり得た。

## 成果の広報・公表

#### （１）公開での紙芝居上演会の開催（平成28年2月27日）

当法人特別養護老人ホームしゃくなげ荘ホールにて、ヒアリング対象者2名、その家族数名、しゃくなげ荘の入所者（紙芝居の鑑賞に耐えられる状態の入所者）、しゃくなげ荘の職員、さらには職員の子ども（小学生）、介護職を目指す学生、新聞部に所属する高校生、周辺地域の方々（幼児2名を含む）等数十名を対象に紙芝居の上演を行った。1人のモデルにつき約30分、2人のモデル分で約1時間上演を行った。驚くべきことに、しゃくなげ荘入所の高齢者からも拍手やすすり泣く声が聞こえるとともに、若者たちの中にも涙を流すものがいた。また、幼児2名、小学生2名も声一つたてずに1時間紙芝居に集中していた。

#### （２）新聞記事に掲載

上演当日は地元ナンバーワンの部数を有する十勝毎日新聞社の取材を受け、上演翌日大きなスペースの記事で掲載されるところとなった。

## ■ 今後の展開

### （1）ヒアリング事業の継続

当施設職員たちは、本事業実施期間中を通して「ヒアリングするだけでも高齢者が元気になる」という手応えを感じていた。したがって本事業モデル対象者2名に限ることなく、ヒアリングが可能な高齢者に対しては、「人生の話を聴く」という機会を少しでも確保していきたい。

### （2）地域社会への波及・普及

2月27日上演会だけに終わらず、十勝管内の高校や介護系短大、専門学校などに対して、本事業成果の紙芝居を出前上演する計画である。若い世代の「高齢者に対する理解」を促す効果があるのではないかと思われる。また同時にそれは若者たちを上質な次代の介護職へと育てるためにも効果があると手応えを感じている。

### （3）研究事業の継続

「人生の来し方ヒアリング」が高齢者を元気にする効果、そしてその紙芝居化が職員や家族との共有を図る上で、また若手介護職を育てる上で大きな可能性を持つという手応えを再確認することはできた。しかし、これを全国に波及させるためには、2事例では明らかに不足である。さらなる事例と調査研究を積み重ねていかなければならない。